令和元年度　横浜市世界を目指す若者応援事業

（個人留学による帰国報告）

●氏名

M.A さん

●留学先

国/都市：チリ/Quillota

外国の高校：Colegio Nuestra Senora del Huerto

●留学期間

2020 年２月２０日～2020 年４月５日

●留学先での活動、留学で学んだこと

私は、地球の裏側、南米のチリに留学した。

私が、今回の留学を通して学んだことの中で、特に印象的だった３つのことを紹介する。

まず１つ目は、愛情表現についてだ。チリの人々は、顔と顔を近づけ、お互いの頬にキスをして挨拶する。挨拶のおかげで、人との心の距離が縮まるのがとても早いなと感じた。実際、この挨拶や、チリ人のオープンな人柄のおかげで、私はホストスクールですぐに友達と仲良くなることができた。クラスメイトは、皆、男女関係なく、この挨拶をする。男女で腕を組んだり、ハグをしたりすることも日常茶飯事だ。私がこの文化から感じたことは、“日常に愛が溢れている”ということだ。家族の中でも、普段からたくさん愛を伝え合う。チリ人は、そのような環境で過ごし、自分が周りの人に愛してもらっているということを感じることで自分に自信を持っているように思った。チリの文化は私に、『普段から人に愛情を伝えることの大切さ』を教えてくれた。

２つ目は、言語を学ぶことの意義についてだ。私は当初、留学先で、日本や横浜のことをホストスクールのみんなにプレゼンテーションをして紹介したいと考えていた。しかし、コロナウイルスの影響で、学校は突然休校になり、さらに留学早期帰国が決まり、実際に登校できたのはわずか10日で、プレゼンテーションなどする暇もなかった。しかしどうし

ても当初の目標であった日本や横浜紹介をしたかったため、私は、隣の家の方に簡単にプレゼンテーションをしたり、日常会話の中で家族に紹介したりすることにした。自分のスペイン語力的にも、規模的にも、自分が出発前に思い描いていたようなプレゼンテーションはできなかった。けれども、スペイン語のみを話す人たちに、自分が勉強して身につけたスペイン語を使って、自分の母国、そして大好きな地元のことを紹介できたことは、とても達成感があった。彼らは、自分がスペイン語を話せなかったら、決して伝えることのできなかった相手だった。この経験を通して、第３言語を学ぶことの意義をとても感じた。今後もより多くの人に、自分にしか伝えられないことをたくさん知ってもらえるよう、他言語の学習を進めていきたい。

３つ目は、当たり前とは、世界の平和、周りの人々の協力があってこそ成り立つもので、決して簡単に得られ維持されるものではないということだ。私は、コロナウイルスという不可抗力による早期帰国を経験した。言葉には表せないほど悔しい思いで帰国した。自分が１年間の留学を通してやりたかったことのうち、わずかしかすることはできず、言語、友達との関係、文化体験など、様々な面において心残りのあるままとなってしまった。学校休校や早期帰国の連絡が来た時、突然自分にとっての当たり前が当たり前ではなくなり、もっと毎日を大切に生活しなくてはならなかったのだと反省した。今後、日常に感謝しながら日々目標意識を持って生活していこうと強く心に刻む経験となった。

実際に現地に留学することができたのはわずか１カ月半となってしまいましたが、準備から帰国まで、家族を始め、学校の先生方、留学団体、そして横浜市世界を目指す若者応援事業様などのたくさんの方々にサポートしていただきました。ありがとうございました。